

つくばね vol.25no.2

目次

- I フンボルトとリッター
- 3 シリーズ・電子ジャーナル(2)
- 5 Ask Us としょかんミニガイド
- 7 本学教官寄贈著書紹介
- 8 私の一冊
- 9 とびっくす
- 10 平成11年度筑波大学附属図書館開館日カレンダー
- 10 掲示板

フンボルトとリッター

手塚 章

私の研究分野(人文地理学)と図書館資料の関係について、が与えられたテーマであるが、以下では筑波大学附属図書館とのごく個人的な係わりを中心に述べてみたい。

表題にかかげた2人は、18世紀末から19世紀の前半にかけて活躍した著名な地理学者であり、「近代地理学の父」として現在もよく紹介される。彼らがいかに有名かは、没後百年の1959年に日本地理学会・東京地学協会主催の「フンボルト・リッター100年祭」が行われたことに表れている。外国人地理学者に対して、この種の催しは2人以外に考えづらい。

もっとも、フンボルトについていえば、単に地

理学者と呼ぶわけにはいくまい。彼は何よりもまず博物学者であり、またドイツを代表する大旅行家であった。また、フンボルト財団の招へいでドイツに滞在した数多くの研究者にとって、フンボルトが地理学と係わっていたことなど、恐らく想像の彼方であろう。

地理学の世界でそれほど有名であったにもかかわらず、私と2人との付き合いは古くない。きっかけは1984年に図書館の大型コレクションとしてフンボルトの「新大陸における熱帯諸地域への旅行(全30巻)」(復刻版)(Voyage de Humboldt & Bonpland; voyage aux régions équinoxiales du nouveau continent) [450.955-H98] が購入されたことで



フンボルト「アンデスとその付近の自然図」(1808年)

ある。命じられてその申請書を作成した私としては、5階の大型書架に豪華本が並べられるや、何度も足を運んだものである。

それまで「地理学史」の講義で聞かされてはいたが、ちょっと古すぎると思ったせいか、ほとんど関心を持たなかったフンボルトが、急に身近な存在になった。読んでみると、なかなか面白いし現代に通じる箇所も多い。ちょうど当時は、地理学方法論の古典を系統的に読み直す作業をしているところであった。そこで、検討対象の時代をほぼ百年さかのぼって18世紀末からとし、フンボルト（と必然的にリッター）の文献を集めだしたわけである。

その成果が1991年に刊行した『地理学の古典』であるが、内容の3分の1をフンボルトとリッターに割り当てた。成立過程からいえば、いわば付加的な部分といえる。しかし、反響が大きかったのは、むしろこの部分で、とくにフンボルトについては多くの方々からお褒めの言葉をいただいた。日本に多くのフンボルト・ファンがいることを再認識したしだいである。

たしかにフンボルトの文章は、現代人にも十分に面白い。彼のもう一つの代表作である「コスモス」は、発売と同時に書店に列ができたという伝説があり、ベストセラー化した世界初の科学書といわれている。いってみれば偶然にフンボルトと出会った私であるが、それからというもの折りに触れてはその著作に読みふけた。

『地理学の古典』ではフンボルトの地理学方法論に焦点をあてたが、作家としての彼の本领がそこにあるわけではない。むしろ、おびただしく残された文章のうち、方法論的な考察はごくわずかなものである。フンボルトの魅力は、フィールドワークに基づく景観や地域社会の具体的な記述にある。こうした観点から編纂したのが『続地理学の古典：フンボルトの世界』で、その中心をなしているのは1799～1804年に行われた熱帯アメリカ旅行である。そこでは、中央図書館に並んでいる30巻本を十二分に活用させていただいた。

したがって、ことフンボルトについては、その

原典の多くが筑波大学の図書館に所蔵されている。「コスモス(全5巻)」(KOSMOS)も一部欠けてはいるが、主要な部分を見ることができる。また『続地理学の古典』にその一部を収録した名著「自然の姿」も、中央図書館で見ることができる。もちろん、重要な文献で欠けているものも多く、国会図書館や他大学の所蔵文献で補う必要がある。しかし、フンボルト関連文献の充実度からいえば、筑波大学はおそらく日本一ではないかと思う。

他方、リッターに関しては、事情が多少こみいつている。結局のところ、『地理学の古典』に収録した文章の原典は、筑波大学の図書館ではなく国会図書館で入手した。また、リッターを代表する大著「地理学(全19巻)」(Erdkunde)にしても、筑波大学には飛び飛びに数冊あるだけで、全貌をうかがうには程遠い。東京大学と京都大学の地理学教室がこの膨大な著作をほぼ完全なかたちで所蔵するのに対して、はなはだ見劣りがする。

先輩にいわせると、かつての東京教育大学では、きちんと揃っていたそうである。筑波移転のどさくさに紛れて、他の貴重図書とともに多くが行方不明になったという説明であった。もっとも、学部学生時代を東京教育大学ですごした経験でいうと、地理学教室の図書室でそれらを目にした記憶がない。当時から現物はあちらこちらの研究室、あるいは教官(もと教官)の書齋に散らばっていたのではないか。移転にさいして、それが表面化したのが事の真相ではなかったらうかと思っている。

現在でも図書の紛失はあるだろうが、移転前とは比べものになるまい。自由に利用でき、きちんと管理するという点で、現行のシステムはなかなか優れている。難をいえば、東京教育大学からの移送図書がまだ別扱いで、中央図書館の1階に眠っていることである。新旧の蔵書が統合されれば、単なる足し算以上の効果を発揮するであろう。

以上、フンボルトとリッターにからめて、図書館と私とのささやかな接触を述べた。もちろん、地理学の分野として、これはいささか異例の部類に属するであろう。

通常の研究プロセスにおいて、最も一般的に使

われる図書館資料は国際学術雑誌である。現在、筑波大学が購入している地理学関係の学術雑誌は、その質と量からいって日本最高のレベルにある。筑波大学は、地理学分野における日本最大の研究センターであり、本学で育ち全国各地に散った地理学研究者が最新の文献を求めて中央図書館詣でをすることもまれではない。

しかし、同時に、東京高師・文理科大学からの伝統を引き継ぐ筑波大学には、過去の貴重な文献資料が眠っている。引越しにともなう多少の散

逸はあるが、その遺産は地理学分野に関するかぎり、東京大学・京都大学の両地理学教室図書室とともに、日本3大蔵書の名にあたいしよう。『地理学の古典』は韓国語版が出され、『続地理学の古典』についても近く刊行の予定であるが、その準備にあたられた韓国の地理学研究者が来日されたおり、中央図書館で当該の原典にじかに接していただいた。それは、筑波大学にいるわれわれが、非常にめぐまれた環境にいることを再認識させてくれる機会でもあった。

(てづか・あきら 地球科学系 教授)

シリーズ・電子ジャーナル(2)

電子ジャーナルの導入をめぐる

9月から、エルゼビア社のSD-21プロジェクトへの参加に伴い、筑波大学においても本格的な電子ジャーナルのサービスが始まりました。電子ジャーナルへの取り組みは、急速に進んでいるのですが、今回は、電子ジャーナルの現況とわが国の大学における電子ジャーナル導入を巡る状況について、見ることにします。

電子ジャーナル・サービスの現況

今のようなインターネット上で学術雑誌が読める電子ジャーナルの登場は、1992年10月のOCLCによるElectronic Journals Onlineが最初とされています。当初は、冊子体の存在しない、オンラインのみのものが中心でした。その後、エルゼビア社のTULIP実験計画の成果を踏まえ、学術出版社系を中心に冊子体の存在するものを電子化して提供する形態が増加し、現在ではこちらが主流になっています。米国で「電子ジャーナルの年」とされている1996年には、各社の電子ジャーナルが相次いで提供され、実験段階から大きく実用段階に踏み込んでいます。

代表的なサービスとしては、学術出版社系では、エルゼビア社のScienceDirect及びEES、アカデミック・プレス社のIDEAL、シュプリン

ガー・フェアラク社のLINK、ワイリー社のInterScience、他にオックスフォード大学出版局、ブラックウェル社などのサービスも知られていません。

学協会系では、米国化学会(ACS)、米国物理学協会(AIP)、米国電気・電子技術者協会(IEEE)、英国王立化学会(RSC)、英国物理学協会(IOP)、英国電気技術者協会(IEE)などの大手が積極的に取り組んでいます。なお、IOPの刊行する35誌については、今年の秋口から、文部省学術情報センターがナショナル・サイトとなり、わが国の学術研究機関に無料提供(各機関の雑誌講読の有無にかかわらず)されることが決まっています。

さらに、スエッツ社のSwetsNet、OCLCのElectronic Collections Online、オーヴィド社のOvid Full Text、シルバークラッター社のSilver Linker(ERLの拡張版)などのように複数の出版社の電子ジャーナルを包括的に提供するアグリゲーター・サービスというものもあります。

わが国では、学術情報センターが日本の学協会誌のフルテキストを提供する電子図書館サービスを1997年4月から始めています。300タイトルに及ぶ学協会誌を提供しています。また、日本化学